

書評 Colin M. MacLachlan, Argentina -- What Went Wrong

| | |
|-----|--|
| 著者 | 佐藤 純 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジア経済 |
| 巻 | 50 |
| 号 | 7 |
| ページ | 72-75 |
| 発行年 | 2009-07 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://doi.org/10.20561/00040824 |

Colin M. MacLachlan,

Argentina : What Went Wrong.

London : Praeger Publishers, 2006, xvi + 221pp.

さとう じゅん
佐藤 純

I はじめに

本書の目的は、なぜアルゼンチンは偉大な国家になるために必要なすべての条件を備えていたにもかかわらず、政治・経済の両面において混乱した国家となってしまったのか、という疑問に答えることである^(註1)。19世紀末葉のアルゼンチンはヨーロッパ先進諸国と並ぶ世界有数の大国であり、スペイン文化とヨーロッパ文化が混在する首都ブエノス・アイレスは多くの欧米人を魅了した。しかし、近年のアルゼンチンの政治・経済の混乱は過去の栄光を色あせたものにしていくことは誰もが認める事実であろう。

チュレーン大学 (Tulane University) 教養学部歴史学科の教授マクラクラン (Colin M. MacLachlan) は、大国となる潜在性を備えていたアルゼンチンに慢性的な政治・経済の混乱をもたらしたのは誰か、あるいは何なのかを追究するために、19世紀初頭の独立期から現代にいたるまでの200年間のアルゼンチン史を考察していく。まずは本書の構成を以下に記す^(註2)。

序 論

第1章 帝国の外辺

第2章 妥協

第3章 都市の現実

第4章 寡頭制と対決する

第5章 ペロンの時代

第6章 遠い影

第7章 プロセスの陰鬱な影, メネム, そしてネオ・リベラリズム

結 論 誰の、または何のせいかな?

II 各章の概要

以下で各章の概要をみていきたい。

序論はアメリカの著名な作家で本書刊行時にチュレーン大学に所属していたプリンクリー (Douglas Brinkley) によって書かれている。プリンクリーによると、政治エリートたちによる近代化政策の結果、19世紀最後の10年間においてアルゼンチンのGDPはアメリカ合衆国のそれに接近し大国となる約束に実質が与えられたという。ところが、20世紀の後半には経済危機に見舞われ、南米地域の経済的リーダーから貧困国へと没落していく。プリンクリーはアメリカもアルゼンチンと同じ轍を踏まないよう、同国の歴史を学ぶ必要があると警告する。

第1章は、リオ・デ・ラ・プラタ連合州が成立した1816年から、独裁者ロサス (Juan Manuel de Rosas) が失脚する52年までの時期を扱っている。現在アルゼンチンと呼ばれる地域は、スペイン・ブルボン王朝が1776年にリオ・デ・ラ・プラタ副王領を設置してから本格的な発展を遂げ、特にブエノス・アイレスは各国の商人が活躍する国際色豊かな都市として繁栄し商人コミュニティは政治的力をもつようになった。著者はこの発展の中で国家形成をめぐる2つの見解が対立したことを指摘する。

第1のもの、物質的進歩を推し進めていくために強力な中央集権化国家を形成すべきだという考えであり、もうひとつは、旧宗主国スペイン国王の権威を利用し各州の独立性を認めた緩やかな統一国家を形成すべきだという考えである。かかる見解の相違は中央集権派と連邦主義派を形成するが、ブエノス・アイレス州のロサスの登場によって後者が勝利する。カウディーリョ (caudillo, 地方ボス) と呼ばれたロサスは、族長的システム (patriarchal system) に基づいて強権的な政治を行ったという。

第2章は、アルゼンチン史において19世紀半ばから20世紀初頭にかけての「黄金時代」と呼ばれる時期を扱っている。連邦主義者ロサス失脚後、中央集権派によってアルゼンチンは、ヨーロッパ諸国に対

する農牧産品（牛肉と小麦）輸出と積極的な移民受入や外資導入政策によって未曾有の経済発展を遂げることとなる。この発展は1890年のペアリング危機（Baring Crisis）によって中断されたが第一次世界大戦にいたるまで続いた。

しかし著者によると、連邦主義派と中央集権派の争いは、平等な共和国の形成という目標を挫折させ国政を牛耳る地方ボスによる寡頭制の出現を惹起したという。彼らは大土地を所有する少数グループであり、経済的には共通の目的をもっているが、その出自は旧スペイン植民地官僚と同盟した商人土地所有者（merchant-landholders）と、主にイギリスからの移民出身者とに分かれていたという。彼らはロサス時代に確立された族長的システムに依存する一方で、ヨーロッパをモデルとしたクラブや社交界、そして婚姻によって結びつきを強め、土地・財産と政治的地位を分配しあい、1870年代までに寡頭制を確立した。本章で紹介される大地主ロペス（Ramón Ropez de Alsaga）の広大なエスタンシア（大農場）の描写は非常に印象深い。

第3章は、19世紀末から20世紀初頭のブエノス・アイレスの実態について記されている。本章で著者が指摘している重要な点は以下の2点である。

第1に、ナショナリストと中産階級の勃興である。これら2つの勢力は寡頭制を揺るがす勢力となる一方で国家を分断する要因となっていく。前者は、クリオーリョ（criollo, アメリカ生まれのスペイン人）の文化の中に真のアルゼンチン性（Argentinidad）を求める人々であり、多くの優れた論客をもち国家の危機を訴えることによって国民を扇動したという。一方、都市化の進行に伴って専門職、教員、軍の将校などの職が増大し、財産や縁故をもたない移民に出世の機会を提供した。これらの職業に就く中産階級の人々は急進党の支持基盤となり寡頭制に挑戦していくこととなる。

第2に、ブエノス・アイレスにおける劣悪な労働環境とエリート文化の間の断絶である。著者による不衛生な食肉包装工場やスラム街の生活の叙述と、欧風カフェやイギリスのデパート・ハロッズ（Harrods）が立ち並ぶフロリダ通りや、ミラノ劇場の2

倍の規模を誇るコロソ劇場の描写は実に対照的である。我々は19世紀末葉から20世紀初頭におけるブエノス・アイレスの国際色豊かな繁栄にのみ目を奪われがちだが、著者の叙述はその影の部分も十分伝えている。

第4章では20世紀初頭から1945年のペロン政権成立までの時期が扱われ、寡頭制の動揺と復活について描かれている。著者は寡頭制に対する挑戦をイデオロギー的なものと非イデオロギー的なものに分ける。前者は社会主義者フスト（Juan Bautista Justo）による雑誌を通しての挑戦であり、後者は1889年に青年市民同盟を結成したアレム（Leandro Niecebro Alem）の武装蜂起による挑戦である。アレムが党の分裂に悩み自殺した後、寡頭層との妥協を図る彼の甥イリゴジェン（Hipólito Yrigoyen）が1916年に政権を握り、19世紀末葉から続く寡頭制に一応の終止符を打つこととなる。

次に著者は1930年代不況期に再び出現した寡頭制について叙述する。1920年代を通して続いた急進党政治は30年に勃発した軍のクーデターによって崩壊し、32年には寡頭層、州の政治家、急進党の一部、そして軍を糾合した保守連合政権（Concordancia）が成立した。著者は同政権下で遂行された親英的経済政策（1933年の通商協定締結など）や、それを痛烈に批判したナショナリストの動向について叙述している。寡頭層は賄賂や不正選挙などの手段を用いることで10年余り政権を維持したが、1943年の軍内の統一将校団（Grupo de Oficiales Unidos）によるクーデターによって最終的な崩壊を余儀なくされた。

第5章において著者は、熱狂的な労働者の支持を得て成立したペロン政権（Juan Domingo Perón, 在職1946～55, 73～74年）が、経済政策の失敗によって崩壊していく過程を、彼の生い立ちや妻のエビータ（Eva Perón）に関する興味深いエピソードとともに描いている。

ペロンは統一将校団に属することによって軍内における立場を確立する一方で、労働局長としての活動を通して労働者の支持を獲得した。大統領就任後ペロンは、自給自足経済（重工業育成）と階級調和を政策目標として掲げ、国家統制経済の確立を急ぐこ

ととなる。この過程で生じた大地主の反発に対しては弾圧（逮捕や拘留）と融和（公職の提供など）によって対処したという。

また、ペロン政権による五カ年計画(1947～52年)の失敗について記されている。その失敗の原因は以下の2点に集約される。第1に重工業の生産性が伸び悩む一方で、労働者に対する手厚い賃金がインフレを惹起したことである。ペロンにとって賃金とは時間と労働の対価ではなく政治的報酬であったという。第2に、国家貿易局創出による農牧産品の最低価格による買い上げ政策である。この政策は地主による耕作放棄を招き農牧産品輸出の停滞を招いた。著者はペロンについて、「政治的戦略は理解していたが経済的なそれは理解していなかった」と総括している。国家の経済的疲弊を招いたペロンは軍内の反ペロン派に追放されることとなる。

第6章がカバーする1955～82年までの約30年間は軍政の時代である。アルゼンチン史において軍は、政治・経済の混乱期においてたびたび政治の表舞台に登場するが、いずれも短期間で退いていった。しかし、オンガニア政権（Juan Carlos Onganía, 在職1966～70年）やビデラ政権（Jorge Rafael Videla, 在職1976～81年）は長期政権の維持に成功した。本章では両政権下におけるアルゼンチンの異常な状態が描かれている。

特に印象深いのは、1976～83年の間に実施された「国家改造過程」（Proceso de Reorganización Nacional, 通称プロセソ）に関する叙述である。軍事政権に対抗して結成されたペロン主義派のテロ組織は、元大統領の誘拐・暗殺事件を起こすほど過激なものとなっていた。軍政はこれらの組織を社会のがん細胞と位置付け徹底的な除去を図り、およそ2万人の民衆を殺害したという。この際政府は、対テロ作戦のノウハウをアルジェリアでの戦闘経験をもつフランスの退役軍人から学んだという興味深い事実も述べられている。いずれにせよ、著者による軍政とペロン主義派間の暴力の連鎖に関する叙述は、なぜアルゼンチンにおいて健全な政党政治が根付かないのかを改めて考えさせる迫力をもっている。

第7章は、ガルティエリ軍事政権（Leopoldo For-

tunato Galtieri, 在職1981～82年）崩壊後の急進党アルフォンシン政権（Raúl Ricardo Alfonsín Foulkes, 在職1983～89年）、ペロン主義派のメネム政権（Carlos Saúl Menem, 在職1989～99年）、そしてキルチネル政権（Néstor Carlos Kirchner, 在職2003～07年）の経済政策を中心に叙述されている。フォークランド紛争によって国民の信用を失った軍は、アルフォンシンに政権を譲りその後政治の表舞台に登場することはなくなった。しかし、アルフォンシン政権における未曾有のインフレや、2001年12月の史上最高額のデフォルト宣言（約1400億ドル）など、アルゼンチンは経済問題に悩まされることとなる。

では、かかる経済問題を政府はなぜ克服できなかったのであろうか。著者はアルフォンシン政権の野心的な経済計画（アウストラル・プラン）やメネム政権による1991年3月の兌換法を軸とするネオ・リベラル戦略について考察し、前者は政府の支出の抑制ができずインフレの克服に失敗し、後者はインフレを兌換法によって克服したが、輸出収入の減少と失業の増大によって経済の崩壊を招いたことを示している。さらに、かかるアルゼンチン国内の経済問題は、IMFや世銀による同国に対する巨額の融資によって国際的な問題へと発展していった。著者は経済政策が長期的視点に基づいて作成されていないことを指摘し、その原因をいまだ根絶されていない軍の存在に怯え大衆受けのよい政策を実施せざるをえないアルゼンチンの政治風土に求めている。

結論では、これまでの検討をふまえ、政治・経済の混乱にあえぐアルゼンチンの病巣が明らかにされている。著者は、中央集権派と連邦主義派、地主と都市労働者、現地人と移民、自由主義派と国家介入主義派、これらの間に存在する断層によって、アルゼンチンは建国以来、国家の基本的な統一を保つことができなかったことを指摘する。同国においては、一時的な妥協はあっても基本的なコンセンサスを実現することができない利害関係の衝突が常に存在してきたのである。かかる断層は、軍や個人のカリスマにより一時的に埋め合わされることはあっても、根本的に修復されることはなかった。そして、この断層はナショナリストの扇情的な宣伝、政治的な思

惑によって決定される不公正な経済政策、公正な選挙や賄賂の禁止などの基本的なルールに基づいた民主主義の機能不全によって深化していると指摘される。

Ⅲ おわりに

いかなる国においても社会の様々なレベルにおいて断層は存在するが、通常は政治・経済・社会の一定のルールに対する国民のコンセンサスによって統一が保たれている。しかし、本書で示されたアルゼンチンの200年間の歴史は、カウディーリョや寡頭層、ポピュリスト、そして軍によって覆い隠すことができない深い断層が社会の様々なレベルに存在することを示している。国家の統一を保てないアルゼンチンにおいて、政治・経済の混乱は克服不可能なのであるか。

著者は「失敗の見本」として同国の歴史を研究しようとする者に対して、アルゼンチンは現在も生命力と活気のある文化をもっているという事実を認識すべきだと注意している。また、アルゼンチンの過去は確かに複雑ではあるが衰退の歴史は決して謎ではなく、不幸な歴史から決別するために政治家の腐敗を許すべきではないと主張している。

本書は一次史・資料を用いた実証研究ではないため、アルゼンチン史研究者にとっては物足りなさを

感じるであろう。しかし、国家の安定に必要なものとは何かを考察しようとする者や、同国の通史を詳細に知ろうとする者にとっては興味深い書物となろう。研究者に限らず幅広い層の読者に読まれることを希望したい。

(注1) かかる問題に関心のある読者は最近刊行された佐野(2009)とConde(2009)を特に参照されたい。

(注2) 本書には「スコットランド人の国外離散」、「アルゼンチンにおける英国皇太子」、「ヴィクトリア・オカンボ」、「サッカー」と題された4つのコラムが挿入されている。

文献リスト

<日本語文献>

佐野誠 2009. 『「もうひとつの失われた10年」を超えて——原点としてのラテン・アメリカ——』新評論.

<英語文献>

Conde, Roberto Cortés 2009. *The Political Economy of Argentina in the Twentieth Century*. Cambridge Latin American Studies 92. Cambridge: Cambridge University Press.

(八戸工業高等専門学校准教授)